

編集後記

天児先生の退職記念号刊行の責任を与えられた時から、私の心の中には、天児先生はきっとご自身が育てられたゼミ卒業生たちを最優先の執筆者として望んでいらっしゃるのではないかと、できれば天児先生の長年のご指導の成果を示す1冊の論文集を編集してみたい、という思いがありました。

そこで、まず卒業生の投稿資格者全員をリストアップすることにしましたが、何しろ元ゼミ生は日本、中国、台湾などアジアの広大な大地に散らばっています。正直、全員と連絡を取るのは無理だろうと思っていました。でも、鄭成さん、張望さんがちゃんと連絡先を見つけてくれてゼミの繋がりを復活させてくれました。執筆対象者が一気に広がると、今度はむしろ紙幅が心配になりました。そこで、投稿希望意思を示した先着順で執筆者を決めるかも、というメールを送ったところ、ほぼ全員から半日以内、最速1秒で返信がありました。結果、全編ゼミ卒業生だけで執筆された一冊の論文集が出来上がりました。

念願は叶いましたが、同時に多くの天児先生の同僚の先生方、縁が深かった先生方に論文執筆を依頼できずに終わってしまったことを、改めてお詫びをしたいと思います。その中には、「そろそろじゃない?」「時間をつくるから」と早くから気にかけて下さったベテランの先生方も多くいたのです。

退職記念号は論文以外にも収録しています。天児先生のお人柄やご業績について、お忙しい中、快くお引き受け下さり、真心をこめてエッセイをご寄稿下さった先生方に心から感謝いたします。その中には、中国からの王逸舟先生も含まれています。写真や主要業績は、修士ゼミOBの松田麻美子さん、現役博士課程の周俊さんが、膨大な情報を粘り強く入手し整理に挑んでくれました。全員野球で校正作業もぎりぎりまで続き、煩雑な追加修正のボールが球種も様々に、国際文献社の高田さんのミットに遠慮なく毎日投げ込まれたのでした。明るい声で温かく励ましながら、受け続けて下さった強肩キャッチャーの高田さんに最大級のお礼を申し上げます。

天児ゼミ卒業生には、論文1本にもまだまだ時間のかかる若手研究者が多くいます。作業の途中では、「あきらめないで頑張れ」「苦しいのはみんな同じ」という先生の声が何度も蘇ったのではないのでしょうか。誤解を恐れずに言わせて頂ければ、天児先生もまた私たち学生の前で、いつでも何でも完璧にスマートにこなす天才研究者、というわけでは必ずしもありませんでした。けれど、天児先生ご自身が、挑戦者・開拓者として現場で駆けまわって奮闘されるお姿、気取らずに失敗から再チャレンジするお姿、信念を照れることなく口にし、「愚直な努力」を尊ぶお姿そのものが模範であったと私は思っています。知性とヒューマニズムは同義だと何度も感じました。他のゼミ卒業生と同じく、天児先生を師匠に持てたことを生涯の誇りに思っています。

2018年1月 平川幸子